第1講 論説文① 長い選択肢の比べ方

長い五択の消し方（四つの型）・区切って照らす／同音異義語・カタカナ語・接続語／抜き出し

読み方のコツ 10分 | 例題 15分 | 練習（本文1題） 40分 | 確認テスト 10分

要点1 長い選択肢は「区切って」比べる

一 **入試の選択肢** あ～おの五択で、一つが六十～八十字と長い。正しい選択肢とまちがいの選択肢は、**前半が同じで、後半の一部だけがちがう**ことが多い。本文のことばをそのまま使った選択肢ほど、つなぎ方を疑う。

二 **まちがいの選択肢の四つの型**

①**本文とちがう一部** 一か所だけ本文と食いちがう（本文「短いことばで」→選択肢「長い時間をかけて」など）。

②**言いすぎ** 「すべて」「必ず」「だれもが」「～だけ」「二度と～ない」など、本文より強い言い方。

③**本文に書いていない** 常識では正しそうでも、本文に根拠となる文がない。

④**原因と結果が逆** 本文の「AなのでB」を「BなのでA」にしている。「～ので」「～から」の前後を見る。

三 **選択肢を区切って本文と照らす（手順）**

①問いの文末に印をつける（なぜか＝理由／どういうことか＝言いかえ／適切ではないもの＝まちがいを選ぶ）。②傍線部の前後で、根拠になる文に線を引く。③選択肢を「／」で二～四つに区切る（「～ので」「～が」や読点の切れ目）。④まとまりごとに本文と照らして○か×をつける。×**が一つでもあれば消す**。⑤二つ残ったら、ちがう部分だけを比べる。

問一 次の【本文】について述べた（1）～（4）の文は、どれもまちがっている。それぞれのまちがいの型として最も適当なものを、あとのあ～えから一つずつ選び、記号で答えなさい。

【本文】本を読む人は、知らないことばに出会う機会が多い。そのため、使えることばの数が少しずつ増えていく。

（1）本を読む人は、知らないことばに出会う機会が少ないので、使えることばの数が少しずつ増えていく。

（2）使えることばの数が多い人ほど、本を読んで、知らないことばに出会う機会が多くなっていく。

（3）本を読む人は、知らないことばに出会うと、そのことばを必ずすべて使えるようになる。

（4）本を読む人は、知らないことばに出会う機会が多いので、作文の点数も上がっていく。

あ　本文とちがう一部　　い　言いすぎ　　う　本文に書いていない　　え　原因と結果が逆

（1）［　　］（2）［　　］（3）［　　］（4）［　　］

要点2　漢字（同音異義語）・カタカナ語・接続語の組み合わせ

一　**論説文に出る同音異義語**　熟語の一字一字の意味から考え、短い例文に当てはめて確かめる。

イギ　意義（ねうち・大切さ）／異議（反対の意見）　カンシン　関心（興味をもつこと）／感心（りっぱだと思うこと）

タイショウ　対象（はたらきかける相手）／対照（くらべ合わせること）／対称（つり合った形）

ツイキュウ　追求（どこまでも求める：利益）／追究（明らかにしようと調べる：真理）／追及（問いつめる：責任）

二　**論説文によく出るカタカナ語**　プロセス（過程）　データ（判断の材料となる資料）　リズム（調子・流れ）　メカニズム（しくみ）　リスク（危険性）　メリット（利点）　ニュアンス（細かな意味あい）　バイアス（かたより）　ルーツ（起源）

三　**接続語の組み合わせ問題**　①空欄の前と後ろの関係（順接・逆接・例示・言いかえ・添加・譲歩）を決める。②「たしかに〜。しかし…」の**譲歩の形**は、二つの空欄がセットで出やすい。③確実に決まる空欄から選択肢をしぼる。④選んだ語を全部入れて、通して読む。

問二　【本文】この町の商店街では、古い建物を直しながら使い続けている。そのため、通りを歩くと、昔の町並みの面影を感じることができる。

【選択肢】①この町の商店街では、／②古い建物を新しく建て直したので、／③通りを歩くと、／④昔の町並みの面影を感じることができる。

【選択肢】の①〜④のうち、本文と合わないまとまりの番号と、そのまちがいの型（前のページの問一のあ〜え）を答えなさい。番号［　　］　型［　　］

問三　次の（1）〜（3）の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

（1）実験の結果を、前の年とタイショウする。［　　］

（2）中学生をタイショウにした調査。［　　］

（3）真理をツイキュウする。［　　］

問四　次の文章の［　A　］〜［　C　］に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、あとの中から一つ選び、記号で答えなさい。

雨の日は外で遊べない。［　A　］、家の中でできる遊びを考えた。［　B　］、紙で作るこまや、しりとりである。［　C　］、こうした遊びには、道具がほとんどいらないというよさもある。

あ　A　そこで　B　たとえば　C　しかし　　い　A　ところが　B　つまり　C　さらに　　う　A　そこで　B　たとえば　C　さらに

え　A　しかし　B　たとえば　C　さらに　　お　A　そこで　B　つまり　C　しかし　［　　］

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

漢字を覚えるとき、ノートに同じ字を何十回も書く人は多い。たくさん書けば、そのぶん手が字を覚えてくれると考えるのだろう。しかし、同じ字を続けて書いていると、二回目からは、すぐ前に書いた字を見て写すだけになりやすい。写しているあいだ、頭はその字を思い出そうとしていない。だから、ノートが字でうまっても、次の日にはもう書けないということが起こるのである。

覚えるために大切なのは、書く回数よりも、思い出す回数である。一度書いたら手本をかくし、何も見ずに書いてみる。少し時間をおいて、もう一度思い出して書く。思い出すのに苦労した字ほど、記憶に残りやすい。手間がかかるように見える方法が、じつは覚えるための近道なのである。

（創心館オリジナル文章）

例題の問いと解き方

問い　――線部とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　同じ字を何十回も書くと手が疲れてしまうので、書く回数を減らして、そのぶんの時間を思い出す練習に使うほうがよいということ。

い　手本を見ずに思い出して書く方法は時間がかかるが、頭が字を思い出そうと働くので、くり返し写すよりも字が記憶に残りやすいということ。

う　手本を見ずに思い出して書く方法は時間がかかるが、一度でも思い出して書くことができれば、その字は二度と忘れなくなるということ。

え　記憶に残りやすい字ほど思い出すのに苦労するので、手本をかくして何度も書き、苦労して思い出す練習をする必要があるということ。

お　手本を見ずに思い出して書く方法は、手本を見て写す方法よりも手間がかからないので、短い時間でたくさんの字を覚えられるということ。

解き方　①問いは「どういうことか」＝傍線部の言いかえ。②根拠は、第二段落「書く回数よりも、思い出す回数」「思い出すのに苦労した字ほど、記憶に残りやすい」と、第一段落「写しているあいだ、頭はその字を思い出そうとしていない」。③④選択肢を区切って照らす。

あ　同じ字を何十回も書くと／手が疲れてしまうので　↓　×（本文に書いていない）

い　思い出して書く方法は時間がかかるが○／頭が字を思い出そうと働くので○／写すよりも記憶に残りやすい○

う　思い出して書く方法は時間がかかるが○／一度でも書ければ、二度と忘れなくなる　↓　×（言いすぎ）

え　記憶に残りやすい字ほど／思い出すのに苦労するので　↓　×（原因と結果が逆。本文は「苦労した字ほど記憶に残る」）

お　写す方法よりも手間がかからないので　↓　×（本文とちがう一部。本文は「手間がかかるように見える方法」）

いとうは前半が同じ。後半の一部まで照らした人だけが、うを消せる。**答え**　い

練習　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（入試の形）

サッカーの試合で、ゴールが決まった。選手たちは抱き合い、スタンドは歓声に包まれる。ところが、主審は耳に手を当てたまま、なかなか試合を再開しない。選手たちも、ベンチの監督も、主審の動きを見守っている。やがて主審はピッチの脇に置かれた画面の前へ走り、映像をじっと見つめた。数分後、主審はゴールの取り消しを告げた。攻めていた選手が、ほんのわずかに前に出すぎていたというのである。喜びの声は、たちまち大きなため息に変わった。

こうした光景は、今ではめずらしくない。テニスでも野球でも柔道でも、映像を使った判定が次々に取り入れられてきた。かつて、判定はすべて審判の目にａ委ねられていた。しかし、人の目にはｂゲンカイがある。速いボールや、重なり合う選手の手足を、一瞬で正しく見分けるのはむずかしい。審判の立つ位置によっては、選手の体のかげになって、肝心の場面が見えないこともある。それでも審判は、その場で何らかの判定を下さなければならない。誤った判定一つで勝敗が入れかわり、選手が何年もかけて積み重ねてきた努力が報われないこともあった。映像判定は、そうした不公平を少しでも減らすために生まれたのである。［　Ａ　］、映像によって救われた選手は少なくないだろう。そのｃイギは大きい。

［　Ｂ　］、映像判定が広まるにつれて、新しい問題も見えてきた。一つは、判定のたびに試合が止まり、試合の［　Ｘ　］がｄ途切れてしまうことである。選手は動きを止めて体を冷やし、観客は喜んでよいのかどうかわからないまま、画面の結果を待つことになる。競技によっては、選手や監督の側から映像での確認を求められる仕組みもあるが、確認を求める回数が増えれば、試合はそのぶん何度も中断される。もう一つは、細かく見れば見るほど、かえって迷いが生まれることだ。ボールが線にかかっているかどうかを確かめるために、映像を何度も拡大し、一こまずつ送って見る。それでも、「どちらとも言える」場面は残る。映像は一秒間に何十枚もの画面を記録するが、①こまとこまの間に起きたことまでは写らないからだ。カメラの角度が変われば、同じ場面がちがって見えることもある。正確さを求めて細かく見るほど、「どこまで確かめれば十分なのか」という問いには、終わりがなくなってしまう。

いっそ、判定をすべて機械に任せてしまえばよいのではないか。そう考える人もいるだろう。実際、テニスの一部の大会では、ボールが線の内側に落ちたか外側に落ちたかを、人ではなく機械が告げるようになった。線の判定に限って言えば、機械のほうが人よりもずっと正確だろう。機械は疲れることもなければ、観客の声に心を動かされることもない。人よりも機械のほうが正しく見えるのなら、人が判定する理由はどこにあるのだろうか。

ここで考えたいのは、そもそも判定とは何のためにあるのか、ということである。判定には二つの働きがある。一つは、何が起きたのかを見きわめる働きだ。もう一つは、起きたことに区切りをつけ、その場にいる全員が次のプレーへ進めるようにする働きである。前者が「正しく見る」ための働きだとすれば、後者は「先へ進む」ための働きだと言える。

子どものころの遊びを思い出そう。鬼ごっこで「タッチした」「してない」ともめたとき、だれかが「今のはセーフ」と言えば、遊びはまた動き出した。そのことばが本当に正しかったかは、だれにもわからない。それでも、みんなが受け入れたからこそ、遊びは続いたのである。試合も同じだ。選手も観客も、一つの結果を受け入れてはじめて、試合は先へ進むことができる。どれほど正確な判定でも、だれもがｅナットクしないまま確認が続くなら、試合は成り立たない。映像が大きく助けてくれるのは前者の働きであり、後者の働きまで映像が代わってくれるわけではない。

（前のページの文章の続き）

では、区切りを支えているものは何だろうか。それは、判定する人への信頼である。すぐれた審判は、迷う場面でもためらわずに笛を吹き、はっきりと手を上げる。選手に説明を求められれば、自分が何を見たのかを短いことばで伝える。その判定が、あとから見れば誤りだったこともあっただろう。それでも②人々がその判定を受け入れてきたのは、審判が自分の見たことに責任をもち、その場で結論を引き受ける姿を見せてきたからだ。反対に、判定のたびに迷い、選手の顔色をうかがってばかりいる審判の判定は、たとえ正しくても、なかなか受け入れてもらえない。人々は、判定の中身だけでなく、判定を下す人の姿勢を信じていたのである。信頼は、一つ一つの判定の正しさだけで決まるものではない。結論から逃げない人の姿が、少しずつ積み重なって生まれるものなのだ。

それなら、映像判定が広まれば、この「引き受ける」役割はいらなくなるのだろうか。そうではない。映像そのものは、「これは反則だ」と語ってはくれない。映像が示すのは、判断のための［　Y　］にすぎない。同じ映像を見ても、どこに目をつけ、どう読み取るかによって、結論が分かれることもある。最後にそれを見て結論を出し、場内に告げるのは、やはり人である。最近では、主審が判定の理由をマイクで観客に説明する競技も出てきた。どの映像の、どこを見て、なぜそう決めたのか。判定に至る［　Z　］がことばで示されれば、観客は、結果に不満があっても、それを受け止めやすくなる。審判は説明することによって、③映像という材料を、みんなが受け入れられる区切りへと変えているのだ。

映像判定の時代になって、判定をする人に求められるものは変わった。見まちがえないことは、もはや審判一人で背負う仕事ではない。そこは機械が手伝ってくれる。そのかわりに、材料を見きわめ、結論を引き受け、それをことばで伝えることが、いっそう求められるようになった。機械の目が鋭くなればなるほど、判定を「みんなのもの」にする④人の役割は、かえって重くなっているのである。判定とは、正しさを追い求めながらも、最後には人と人とが一つの結果を分け合い、先へ進むための約束なのだ。

（創心館オリジナル文章）

問一　二重傍線部ａ～ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

ａ［　　］ねられて　ｂ［　　］　ｃ［　　］　ｄ［　　］れて　ｅ［　　］

問二　［　A　］・［　B　］に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　Aなぜなら・Bしかし　い　Aたとえば・Bつまり　う　Aたしかに・Bだから　え　Aたしかに・Bしかし　お　Aしかし・Bたとえば［　　］

問三　［　X　］～［　Z　］に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　X　リズム　Y　プロセス　Z　データ　　い　X　プロセス　Y　データ　Z　リズム　　う　X　リズム　Y　データ　Z　プロセス

え　X　データ　Y　リズム　Z　プロセス　　お　X　プロセス　Y　リズム　Z　データ

問四　傍線部①「こまとこまの間に起きたことまでは写らない」とあるが、筆者はこのことを例にあげて、どのようなことを述べようとしているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　映像は人の目よりも見落としが多く、細かく確かめれば確かめるほど誤りが増えていくので、判定に映像を使うのはやめるべきだということ。

い　映像をどれほど細かく確かめても、どちらとも決められない場面は残るので、正確さを求めるほど、確かめる作業にきりがなくなるということ。

う　映像をどれほど細かく確かめても、どちらとも決められない場面は残るので、最後は観客の声を聞き、多いほうの意見で決めるしかないということ。

え　映像を記録する機械の性能はまだ十分ではないので、一秒間に記録できる画面の数をもっと増やせば、どちらとも言える場面はなくなるということ。

お　どこまで確かめれば十分かを決めないまま映像を見続けるので、ボールが線にかかっているかどうかが、どちらとも言える場面になるということ。

問五　傍線部②「人々がその判定を受け入れてきた」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　審判の判定は、映像で確かめたときと同じくらいいつも正確で、あとから見直しても誤りだと言える判定は、ほとんど一つもなかったから。

い　映像のなかった時代には、判定が正しいかどうかをあとから確かめる方法がなく、人々は審判の判定にだまってしたがうほかなかったから。

う　審判が選手に判定の理由を、長い時間をかけてくわしく説明したので、選手も観客も、判定の中身を一つ残らずすっかり理解できたから。

え　審判が迷う場面でもためらわずに笛を吹いたことで、試合がすぐに再開され、選手も観客も、もう判定のことを気にしなくなったから。

お　審判が、迷う場面でも自分の見たことに責任をもって、その場で結論を引き受ける姿を見せてきたので、人々はその姿勢を信じてきたから。

問六　筆者は、判定には二つの働きがあると述べている。そのうち、映像が代わってくれるわけではない働きはどのような働きか。「～働き」に続くように、本文中から三十字以上四十字以内で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。　はじめ［　　］～終わり［　　］

問七　傍線部③「映像という材料を、みんなが受け入れられる区切りへと変えている」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　審判が、映像のどこを見てなぜそう決めたのかをことばで示すことで、結果に不満がある人も受け止めて先へ進めるような結論にしているということ。
い　審判が、映像を観客にも見せて、その場にいる全員の意見を聞きながら判定を決めることで、だれもが賛成した結論にしているということ。
う　審判が、判定の理由をマイクで説明することで、結果に不満をもつ人を一人もいなくし、どんな判定にもだれもが賛成するようにしているということ。
え　審判が、映像のどこを見てなぜそう決めたのかをことばで示すことで、映像を見なくても、判定の正しさがだれにもわかるようにしているということ。
お　観客が判定を受け入れるようになったので、審判は、映像のどこを見てなぜそう決めたのかを、ことばで説明できるようになったということ。

問八　傍線部④「人の役割は、かえって重くなっている」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。「材料」「区切り」という二つの語を使って、四十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九　本文について述べたものとして適切ではないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　冒頭でサッカーの試合の具体的な場面を示し、そこから、映像判定がさまざまな競技に取り入れられているという話へと広げている。
い　筆者は、映像判定が判定の誤りによる不公平を減らしてきたことを認めたうえで、映像判定が広まって見えてきた新しい問題を取り上げている。
う　筆者は、映像判定が広まった今、審判は見まちがえないよう気をつける必要がなく、判定の理由を説明することだけに力を注げばよいと考えている。
え　鬼ごっこの例は、結果が本当に正しいかどうかより、みんなが受け入れて先へ進むことのほうが大事な場合があることを、身近な場面で示している。
お　筆者は、判定する人への信頼は、一つ一つの判定の正しさだけで決まるのではなく、結論から逃げない姿が積み重なって生まれるものだと述べている。

確認テスト（10分・100点）　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学校の廊下には、たくさんの張り紙がある。一つ一つは大切な注意だ。［　A　］、張り紙が増えるほど、人はそれを読まなくなる。自分にａカンシンのある注意を探そうとすれば、一枚ずつ読んで確かめる作業が必要になる。人は①その手間をｂ省くために、並んだ張り紙をまとめて「いつもの景色」として見すごし、本当に知らせたい注意まで目にとまらなくなる。［　B　］、張り紙が三枚しかなければ、人は足を止めて読むだろう。

伝えたいことを全部書けば、書く側は何も書きもらさずにすむ。しかし、それは、どれが大切かを選ぶ作業を、読む人にｃオしつけることでもある。何を書くかを選ぶのは、本来、書く人のｄヤクメなのだ。②伝える量を減らすことが、かえってよく伝えることになる場合があるのは、そのためである。大切なのは、相手が受け取れる量を考え、伝えることをｅシボりこむことだ。

（創心館オリジナル文章）

問一　二重傍線部ａ～ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。（各4点）

ａ［　　］　ｂ［　　］く　ｃ［　　］しつける　ｄ［　　］　ｅ［　　］りこむ

問二　［　A　］・［　B　］に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。（20点）

あ　Aだから・Bまた　い　Aところが・B反対に　う　Aつまり・Bさらに　え　Aところが・Bだから　お　Aまた・B反対に　［　　］

問三　傍線部①「その手間」とは、何を指しているか。本文中から十三字で抜き出しなさい。（25点）

［　　］

問四　傍線部②とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。（35点）　［　　］

あ　張り紙が三枚以下であれば、人は必ず足を止めてくわしく読むので、どんな注意でも三枚にまとめて書けば、だれにでも確実に伝わるから。

い　伝えることを書く人が選んでしぼれば、読む人は大切なものを探す手間がいらなくなり、自分で考えて注意を守ろうとする気持ちが強くなるから。

う　人が張り紙を読まなくなったので、書く人は、伝えたいことを全部書くのをやめて、張り紙の数を少しずつ減らすようになったから。

え　伝えることを書く人が選んでしぼれば、読む人は大切なものを探す手間がいらなくなり、本当に知らせたいことが目にとまりやすくなるから。

お　伝えたいことを全部書くと、書く側は何かを書きもらしてしまうおそれがあるので、書く量を減らしたほうが、まちがいが少なくなるから。

入試にチャレンジ　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（一部だけちがう選択肢を見分ける）

推理小説を一度読み終えた人に、「もう一度読んでみたら」とすすめると、たいてい不思議そうな顔をされる。たしかに、一度目の読書を引っぱるのは、「この先どうなるのか」という問いである。結末を知れば、その問いはもう生まれない。

けれども、二度目の読書には、一度目にはなかった楽しみがある。結末を知っている読者は、先を急ぐ必要がない。そのため、一度目には読み飛ばした何気ない会話や、部屋の様子を描いた一文に目がとまる。そこに結末へとつながる手がかりが置かれていたことに気づく。二度目の読書は、「何が起こるか」ではなく、「どのように書かれているか」を味わう読み方なのだ。①結末を知っていることは、読む楽しみをうばうのではなく、楽しみの種類を変えるのである。このことは、物語に限らない。何度も聞いた曲にも、知っているからこそ聞こえてくる音がある。すでに知っているものにもう一度向き合うことでしか、得られない発見もあるのだ。②知っていることは、見ることを終わらせる理由にはならない。むしろ、そこから新しい見方が始まるのである。

（創心館オリジナル文章）

問一　傍線部①とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　結末を知っている読者は、はじめに最後のページを読んでおけば、推理小説を一度目よりもずっと楽しく読めるようになるということ。
い　結末を知っている読者は、先を急がずにすむので、一度目に読み飛ばした文に目がとまり、結末とはちがう物語を想像して楽しめるということ。
う　結末を知っている読者は、先を急がずにすむので、一度目に読み飛ばした文に目がとまり、作者がどう書いたかを味わう楽しみ方ができるということ。
え　小さな手がかりに気づくようになったので、読者は、結末を知っている物語でも、先を急がずにゆっくりと読み返すようになるということ。
お　結末を知っている読者は、一度目に読んだときよりも、二度目に読んだときのほうが、どんな物語でも必ず深く楽しめるということ。

問二　傍線部②とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　すでに知っているものでも、時間がたつと中身の多くを忘れてしまうので、もう一度向き合って、忘れたことを覚え直す必要があるから。
い　一度見ただけでは、ものの本当の姿はけっしてわからないので、どんなものでも二度以上見なければ、正しく知ったことにはならないから。
う　新しい見方が始まると、私たちは、すでに知っているものにもう一度向き合いたくなり、同じものを何度もくり返し見るようになるから。
え　すでに知っているものにもう一度向き合うと、知っているからこそ気づけることが見えてきて、そこから新しい見方が始まることがあるから。
お　すでに知っているものにもう一度向き合うと、知っているからこそ気づけることが見えてくるので、まだ知らないことを知る必要はなくなるから。

解答（答えと短い解き方）

第1講　論説文①　長い選択肢の比べ方

要点1の確かめ

問一　（1）あ　（2）え　（3）い　（4）う

（1）「少ない」だけが本文とちがう。（2）原因と結果を入れかえている。（3）「必ず」「すべて」が強い。（4）本文に書いていない。

要点1・2の確かめ（つづき）

問二　番号　②　型　あ

②の「新しく建て直した」だけが本文とちがう（本文は「直しながら使い続けている」）。

問三　（1）対照　（2）対象　（3）追究

（1）くらべ合わせるので「対照」。（2）はたらきかける相手なので「対象」。（3）明らかにしようと調べるので「追究」。

問四　う

A：理由→結果で「そこで」。B：家の中の遊びの例で「たとえば」。C：よさをつけ加える添加の「さらに」。

練習　論説文（入試の形）

問一　a ゆだ　b 限界　c 意義　d とぎ　e 納得

a「委ねる」は「ゆだねる」。c ねうちの「意義」（「異議」「異義」と区別）。d「途切れる」は「とぎれる」。

問二　え

Aでよさを認め、Bのあとで「新しい問題も見えてきた」と反対へ進むので、「たしかに～。しかし…」の譲歩の形。

問三　う

X：試合の流れ＝「リズム」。Y：「映像という材料」の言いかえ＝「データ」。Z：結論までの道すじ＝「プロセス」。

問四　い

直前の「『どちらとも言える』場面は残る」と、段落の最後の「問いには、終わりがなくなってしまう」と合う。

問五　お

すぐ後ろの「審判が自分の見たことに責任をもち、その場で結論を引き受ける姿を見せてきたからだ」が根拠。

問六　（はじめ）起きたこと　～　（終わり）ようにする

「後者」が指すものを前の段落で探す。「起きたことに区切りをつけ……進めるようにする」（三十六字。読点も一字）。

問七　あ

直前の「判定に至るプロセスがことばで示されれば……受け止めやすくなる」と、区切りの働きが根拠。

問八　（例）映像は判断の材料を示すだけで、結論を引き受け、ことばで伝えて全員が受け入れられる区切りをつけるのは人だから。

採点の要素：①映像は判断の材料を示すだけ　②結論を引き受け、ことばで伝えるのは人　③全員が受け入れて先へ進める区切り。

問九　う

「適切ではないもの」を選ぶ。う：「そこは機械が手伝ってくれる」であり、気をつける必要がなくなったとは言っていない。

確認テスト

問一　a関心　bはぶ　c押　d役目　e絞　（各4点）

a興味をもつ意味の「関心」（「感心」と区別）。b「省く」は「はぶく」。cてへん。eいとへん。送りがなは答えない。

問二　い　（20点）

A：予想とは逆に「読まなくなる」と続くので「ところが」。B：反対の場合をくらべているので「反対に」。

問三　一枚ずつ読んで確かめる作業　（25点）

指示語「その」は前を見る。すぐ前の文の「一枚ずつ読んで確かめる作業」（十三字）。

問四　え　（35点）

直前の「何を書くかを選ぶのは、本来、書く人のヤクメ」と、第一段落「三枚しかなければ、人は足を止めて読むだろう」が根拠。

入試にチャレンジ

問一　う

「この先どうなるのか」を追う楽しみから「どのように書かれているか」を味わう楽しみへ変わる。

問二　え

前の「知っているからこそ聞こえてくる音がある」と、後ろの「そこから新しい見方が始まる」が根拠。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。